2019年10月22日発行・発売(年4回 1・4・7・10月　各月22日発売) 第31巻　第12号(通巻294号)

FlyFisher MAGAZINE

【フライフィッシャー】
Mid Autumn
2019 No.293
TSURIBITO-SHA
2,100YEN

フライライン大宇宙

それはフライフィッシングを象徴するもの。

多様化と混沌。　自分に合った1本がほしい。

●ラインメーカー・ブランドストーリー　●渓流用#3〜4ライン38本振り比べ

渓で夜を過ごすという冒険

●源流フライフィッシャーのギア
●静岡県・大井川支流
●長野県・三峰川支流
●新潟県・荒川

and more……

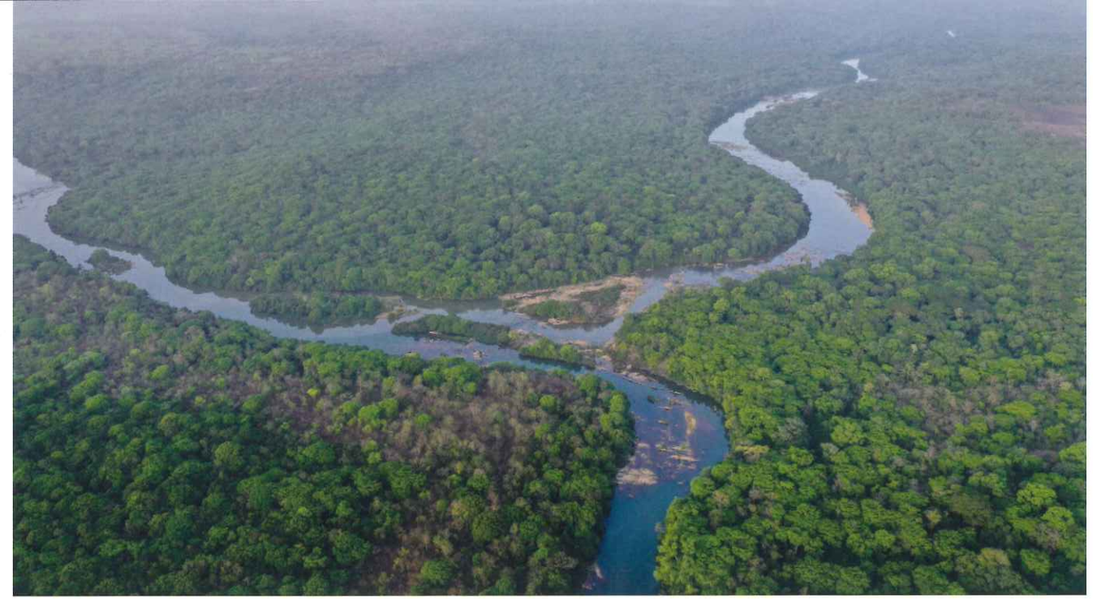
最後の冒険

中央アフリカにゴライアス・タイガーフィッシュを追う。

The Last Great Adventure

けたたましく電話が鳴った。
「フランソワ！」
「どうした、エドワード？」
「いよいよ資金の工面がついたよ。
シンコ川へ行こう！
ついに本格調査の開始だ」

フランソワ・ボタ＝文・写真
Text & Photography by Francois Botha
問合先　info@goliathexpeditions.com



シンコ川とその支流ボボド川の合流点

5週間220kmの探検旅行は、まずボートの組み立てから始まる

首都バンギからチャーター機でシンコプロジェクトの本部に到着

バンギで荷物を受け取ると、エドはすぐにヤマハの船外機などの装備の再組み上げに取り掛かった

出発

アフリカやフライフィッシングについて知っていることをいったんすべて横に置いて、ちょっと思い浮かべてほしい。

アフリカ大陸のど真ん中に、人々から忘れ去られた手つかずの1本の川がある。名前をシンコ川という。この澄んだ秘境は、いにしえから飛沫をあげ、絶え間なく火山岩の岩盤を磨き続け、果てしない森とサバンナの大地を縫うように蛇行している。

この川には、実はこれまで棲息することが知られていなかったある魚が潜んでいる。まがまがしく、そして美しい魚。世界で最も珍しく、キャッチが難しいゲームフィッシュといってよい、ゴライアス・タイガーフィッシュだ。

私はフランソワ・ボタ。南アフリカ人のフライフィッシングガイドだ。ゴライアスの未知のポイントを開拓することが私の夢で、これまで幾度となくアフリカの各地をさまよい歩いてきた。ゴライアスの生態はノーマルタイガーフィッシュと大きく異なり、謎に包まれている。

しかし、２０１４年、ついに中央アフリカのシンコ川で、ゴライアスをフライフィッシングでねらえる場所を見つけた。

この喜びの旅を終え、南アフリカの自宅で一部始終を思い起こしていると、疑念がも湧いてきた。あのポイントであの日たまたま釣れただけかもしれない。ゴライアスはまだ同じポイントにいるのだろうか？

ひょっとして何か重大なことを見落としていないだろうか？

そんな想いを解消する方法は、もちろんたったひとつしかなかった。

再度シンコ川へ本格調査に向かうため、私は古くからの友人であるエドワード・ガウイに話を持ちかけ、彼とタッグを組むことにした。

隔離

２０１９年、キャンプをしながらシンコ川を下る６週間２２０㎞の旅に必要な装備として、２艘のインフレータブルボート、船外機、ソーラー充電システムを備えたキャンプセットなどを梱包したコンテナを、南アフリカからケニアとカメルーンを経由して中央アフリカの首都バンギまで送る。私たちは荷物の現地到着に合わせてバンギへ向かった。到着後バンギですべてのギアを組み立て、台所用品、食料品、消耗品など必要なあらゆるものを調達した。出発前に突然、週末のピクニックに行くとでも思っている政府の関係省庁からインタビューを受ける。「やれやれ」といったところだ。

チャーターした小型飛行機にすべての荷物を積み込むと、まずバンギからシンコ環境保全区に向かって中央アフリカの国土を東に向かって横断した。そしてシンコ保全区にてランドクルーザーへすべての荷物を再度詰め込み、シンコ川を目差して調査クルーとともに古いブッシュロードを一日走り続けた。

いよいよ調査の幕開けだ。

遭遇

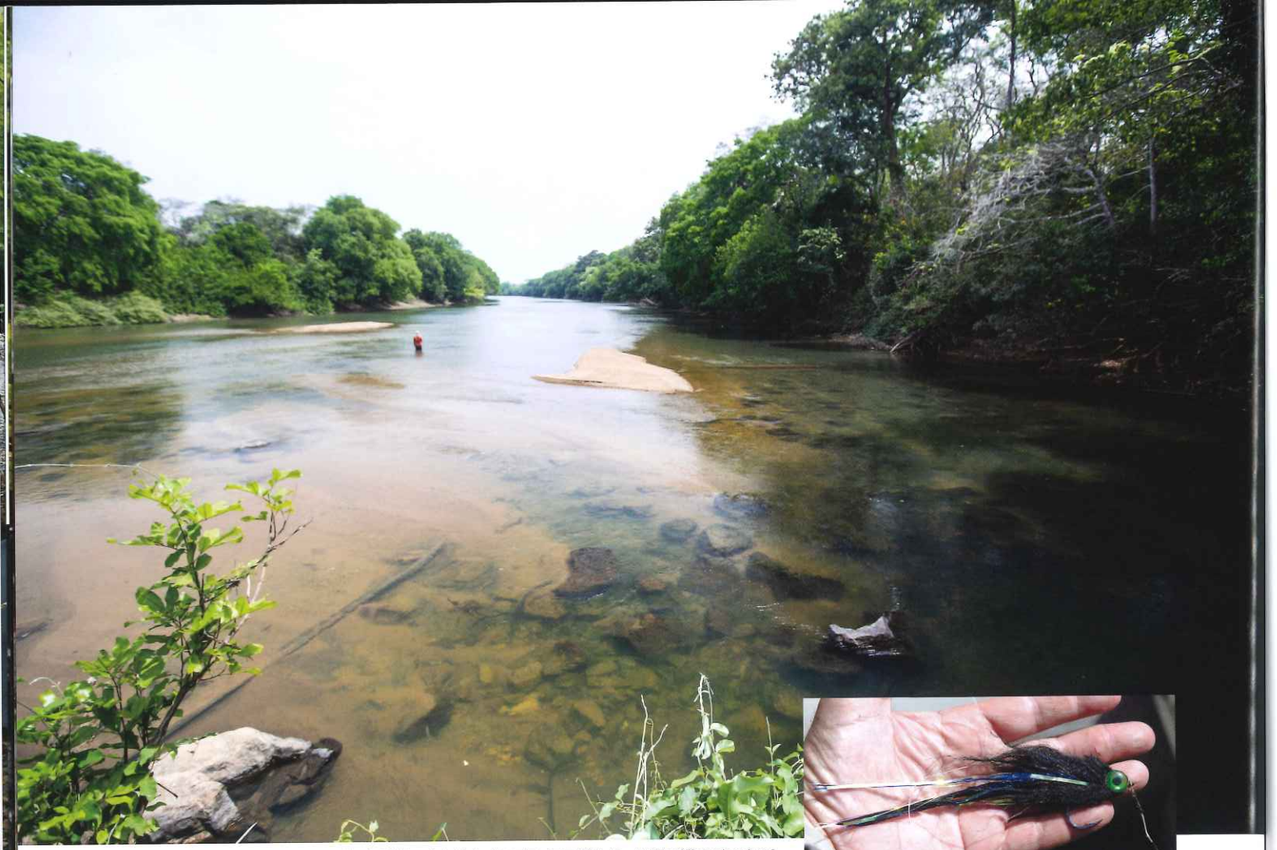
ぎっしり荷物の詰まったボートを漕ぎ出すと、すぐにエドワードから前回の私の

最後の冒険

中央アフリカにゴライアス・タイガーフィッシュを追う。

The Last Great Adventure

エドワードはそれまでにゴライアスを何尾かフッキングさせていたが、彼だけがまだランディングできていなかった。やっとここで初めての魚を手にした



素晴らしいシンコ川は平均してこのように浅い川だが、こんなポイントにゴライアスが！ときっと誰もが驚くことであろう

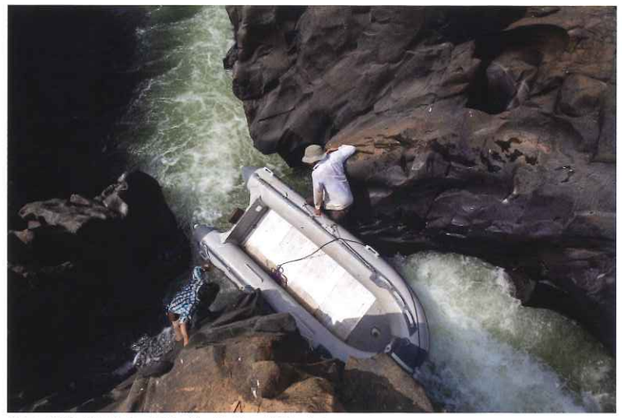
今回ヒットが多かったジャック・ロッター（@flybefok）制作のゴライアス用フライパターンのひとつ

モリイノシシ、このような雄大な生き物は比較的視力が悪く、岸沿いで遭遇した場合はかなり近づくことができる

シンコの生物多様性は驚くべきものであるが、地中のミネラル濃度は低く、多くの動物は自然のミネラルを舐めることで摂取している

ギニアフォウル、ホロホロチョウの一種

中央の動物はウオーターバック。アンテロープの一種で、川のほとりでよく見ることができる



今回の行程の途中にある急流。ボート下りの難所である

ナイルパーチは世界最大の淡水魚のひとつだが、シンコ川でキャッチするとゴライアスよりサイズが見劣りしてしまうのは致し方ない

最後の冒険

中央アフリカにゴライアス・タイガーフィッシュを追う。

The Last Great Adventure

調査について質問攻めにあった。その時点まで私は実際に釣ったゴライアスの数と秘密のポイントについて彼にさえも打ち明けていなかった。

前回ゴライアスがヒットしたポイントは、既にうろ覚えだったがとても特徴のある構造をしたプールだった。そんなことをいってもエドワードに伝わるはずもなく、仕方がなく彼はノーマル・タイガーフィッシュがいそうなポイントが現われるたびに熱心にキャスティングを繰り返した。そして数日が過ぎた。

ある日のことだった。「多分このあたりがポイントだったと思う」と私がつぶやいたその数分後、ゴライアスが目の前の水面にローリングをして姿を見せた。私たちは息をのんだ。私はすぐさまそのゴライアスをめがけてフライを投げた。5回目のキャストだったろうか、ドン！　と重いアタリがあった後手応えがなくなり、短くなったリーダーが水中から戻ってきた。

「ゴライアスだ……」

引き続き少し川を下ると見慣れたような流れに到達したが、私はまだはっきりと確信が持てなかった。ここは本当にあの時のポイントだろうか？

ボートは流れに乗り、巨木、岩場、そして澄んだ川の深みまで続く大きなサンドバーに囲まれたプールの真ん中に流れ着いた。日陰の側に向けてキャストすると、数秒後にフライの後ろに何かが現われ、奇妙にギラリと光ると同時にフライがひったくられた。

「来た！」

私が思わず叫ぶと、巨大な魚が水面を割り一同がその姿に驚愕した。根気のいるファイトが始まり、何回かの緊迫したやりとりを経てランディングしたのは、メーターオーバーのゴライアス・タイガーフィッシュだった。

魚を手にした瞬間、5年前に最初のゴライアスをキャッチしたのがまぎれもなくこの同じプールであることをなぜかはっきりと思い出した。まるでシュールな夢をみているようだった。

それからの数日間、シャローエリアをパスしながら、ゴライアスが潜んでいそうな深い淵を求めて川を下りながらキャストを繰り返した。小型のゴライアス、ナイルパーチ、ノーマル・タイガーフィッシュなどさまざまな魚を見つけ出し、水面へ誘い出し、フッキングし、時々ジャンプでバラすこともあったが、多くの魚をランディングした。こんなによい釣りができるなんてメンバーの誰も予想していなかったし、ゴライアスの着き場や時合もだいたい予想がついたように思えた。でも、エドワードも私も、なんとなくまだ物足りなさを感じていた。

探　索

ふと気分を変えて、ゴライアスが潜んでいなさそうな浅い水域で、「リバーバッファロー」と呼ばれるバーベル（ニゴイ）の大ものをねらってみることにした。

お気に入りのニンフロッドを取り出し、私たちに向かって急流を遡り近づいてきている1尾の特大のリバーバッファローへねらいを定め、キャストを始めた。数回のキャストの後、手を休めてボートの近くに迫っているその魚に目を凝らすと、魚はちょうどエドと私のほうを向いた。その瞬間、2人は同時に叫び声をあげた。

「ゴライアスだ！」

巨大なゴライアスはボートの横でふと泳ぎを止めると、私たちの姿を上から下までじろりと眺めまわした。そして数秒後、上流へ静かに泳ぎ去った。驚きのあまりしばらく口がきけなかった。

「こんなに近くで泳いでいるゴライアスを見かけるなんて、夢にも思わなかったよ」

「エド、この手の魚のフライフィッシングの知識では誰にも負けないと自分では思っていたけど、まだまだだな」

このまま黙って帰るわけにはいかなかった。課題がはっきりした今、私たちは考えられるあらゆるシチュエーションでゴライアスを捜すことにした。淵尻の流れ出しに定位していないか、ベイトフィッシュの群れを追いかけまわしていないか、好奇心で走行中のボートを追いかけていないか。

調査メンバーとして同行したマイクも、その場でアピール度の高いフライを巻き始めた。何本かのフライを手早く巻き終えると、ラインに結んでゆっくりと川に降りた。

「よし、みんな俺のフライの魔力を見てろよ！」

マイクはマジックフライを駆使し、宣言どおりに巨大なゴライアスをフッキングした。火を噴くように70mのラインが一気に引き出され、到底ランディングできそうにないことは誰の目にも明らかだったが、やっぱり残念ながらこのゴライアスを手にすることはできなかった。でもだいじな

最後の冒険
中央アフリカにゴライアス・タイガーフィッシュを追う。
The Last Great Adventure

エドワードと今回の旅で彼がキャッチした最大のゴライアス、107cm

ことは、この川にフライでねらうには大きすぎるゴライアスがいると証明されたことだ。むしろそのことこそ、私たち全員が夢みていたことだったのではないか？

旅の終わりが近づくと、私たちは手練れのハンターのように手際よく川沿いに移動しポイントに立ち寄った。そして意外な場所でメーターオーバーのゴライアスを発見した。そして彼らと巡り合うたびにエウレカ(見つけた)！ という喜びと、心臓が止まるような圧倒的な激しい衝撃を同時に味わった。

私たちは想像していたよりも多くのゴライアス・タイガーフィッシュをフライでキャッチすることができたが、間違いなくゴライアスのほうが勝者だった。彼らはフライラインを引きちぎり、ループを引きちぎり、50ポンドのワイヤを噛みちぎり、ロッドをへし折り、私たちを打ちのめした。

保　全

今回の調査における最高のひと時は、バックウオーター・ラグーンで今回最大の魚キャッチした時のことだ。

あまり期待できなさそうな狭いアウトレットを下り続けていた。ラインのもつれをほどいていた時、流れていないフライに猛烈なアタックがあり、私は面食らった。何の変哲もないその細流を下る間に、さらに3尾の大きなゴライアスが、激しくヒットした。ゴライアスからたった1回のヒットを得るために必要なことしかまだ知らない釣り人が、こういった出来事をどう説明できるだろうか？　そんなことできっこない。

私たちは経験したものの壮大さを実感しながら、シンコ川を後にした。6週間以上におよぶ220kmの旅の間、私たちはいつさいほかのヒトに出会うことも、ヒトの声を聴くことも、ヒトの痕跡を見つけることもなかった。

この、母なる自然は完璧だった。生態系のシステムは魔法のようでもあった。しかし周囲の土地は密猟と牛の放牧による森林の侵食で、間違いなく大きな被害を受けており、もしシンコ川がアフリカンパークスとシンコプロジェクトの環境保全の努力により守られていなければ、ほとんどが失われていたに違いない。過去8年間に、彼らは保護区のエリアを2万㎢に拡大し、牛の放牧や密猟、紛争から守っている。

地域の野生動物への造詣を深め、以前はこの地域における生息が知られていなかったチンパンジーなどを発見したことは彼らの一部の取り組みにすぎない。彼らは、シンコ川の源流からコンゴ川支流への合流点に至るこの流域の生態系全体を保護するという壮大な計画を進めているが、資金面で課題も抱えている。

寄付のみを資金源として環境保全活動の拡大にあたっているシンコプロジェクトとアフリカンパークスは、世界で類を見ない最大の環境保全のプランを達成するために、常に人々と企業の貢献を必要としている。

エドワードと私は11月にシンコ川に戻り、シーズンごとに数人が宿泊できるキャンプの建設を開始し、この保全活動に有意義な貢献をしたいと考えている。私たちの最大のアドベンチャーは、これから始まろうとしている。

語らずにはいられない。
「神話」という言葉に値する魚。

今回フライでキャッチしたゴライアスは、すべてていねいにリリースされた